



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

四旬節第5主日 A年 (2023年3月26日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：エゼキエル書 37章12—14節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 8章8—11節

福音朗読：ヨハネによる福音書 11章1—45節

よみがえりと復活

今日の福音で、ラザロは墓の中から「よみがえり」ます。生き返ったのです。イエスさまは死んで三日目に墓の中から「復活」します。「よみがえり」と「復活」は果たして同じものなのでしょう。

「よみがえり」は動詞「よみがえる」の連用形が名詞化したものです。「よみがえる(甦る、蘇る)」はもともと「黄泉から帰る」の意味だそうです。そこから、①死んだ人、死にかけての人が、息を吹き返す。生き返る。蘇生する。②衰えたものがまた盛んになる。という意味が生まれます(三省堂、大辞林第三版)。ラザロは、死者の中からよみがえりました。生き返ったという意味です。生き返った後のラザロはどうしたのでしょうか。恐らく、姉妹のマリアとマルタと過ごしていたことでしょう。しかし、やがて寿命が尽きて死んでいったと思います。

しかし、イエスさまの「復活」は違います。父なる神は、イエスさまを死者の中から立ち上がらせました。そして、イエスさまは永遠に生きるものとなったのです。イエスさまの死と復活は、いのちは死によって制限されないことを表しています。今日の福音でイエスさまは、兄弟の死に泣き悲しむ姉妹たちに、いのちは死では終わらないことを悟らせ、永遠のいのちへの希望があることを教えようとなさったのでしょ。

今年も復活祭には多くの方々が洗礼を受けることでしょう。洗礼は、神の子としての新しいいのちへと生きることの始まりです。洗礼志願者はイエスさまと共に古いのちに死んで、死者の中から立ち上がらせていただいた復活のイエスさまと一緒に新しいいのちを生き始めるのです。

第一朗読は『エゼキエル書』からです。預言者エゼキエルは、バビロン捕囚で連れて行かれ、捕囚地で活動した預言者です。『エゼキエル書』37章は前半(1-14節)と後半(15-28節)に分かれます。前半では復活についての幻が描かれ、後半では「神の民の新生」が語られます。今日の第一朗読で

は前半の幻の箇所から、幻の解釈(11-14節)の一部が読まれます。

12節の「墓」に注目してください。ヘブライ語でエヴェルというそうです。これは「埋葬する」(カーヴァル)から派生したことばだそうです。旧約聖書には葬儀の場面や、壮大な墓を描写する記述はほとんどありません。死後の世界よりも、この世で神と出会い、交わるのが大切だと考えられていたからでしょう。今日の朗読では、「墓」は捕囚の地バビロンを指しています。将来に希望を抱けない捕囚の生活は、イスラエルの人々にとって死も同然だからです。しかし、「イスラエルの地に連れて行く」という神のことばの中に神との出会い、交わりへの希望が隠されています。

第二朗読の『ローマの信徒への手紙』にはたくさんの主題が示されていますが、8章でパウロは、肉と霊の対比をしながら、「事実、肉の指図のままに生きる者は、肉のことを思い、霊に従って生きる者は、霊のことを思います。肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和です」(5-6節 フランシスコ会訳)と結論づけています。

10節に注目してみると、「義」(ディカイオシュネー)という単語があります。もともとは裁き手もっている「正義、公正」の意味です。しかし多くの場合、神が人間に求める「義、正しさ、正義」を表します。また人生の歩みの動機となるような「義」、つまり人生観、価値観をも表し、さらにはキリスト者の特徴を表すのが神に対する「義」ですので、「キリスト教」と同義でも用いられます。

特にパウロは独特な考え方で「神から贈られた義、神の義」を表しています。人間の信仰によって神から与えられる「義」は、救われた者にいのちを保證するのです。

『ヨハネによる福音書』では、イエスさまがなされた不思議なわざを「しるし」と言います。今日の朗読箇所にあるラザロのよみがえりの物語は、一連の「しるし」の最後に位置づけられるものです。

33節に「憤りを覚え、興奮し」とあります。フランシスコ会訳では、「心に憤りを覚え、張り裂ける思いで」となっています。岩波書店の訳では、「心の深いところで憤りを覚え、かき乱され」となっています。直訳すると「霊において憤慨する」となります。これは、言葉の調子などによって怒りや感動を表すという意味だそうです。厳しく命令するという意味もあるそうです。「興奮し」は12章27節でも、13章21節、14章1節、27節でも使われています。十字架の死に向かうイエスさまの心情を表す言葉だと言えるかもしれません。

39節の「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」には背景があります。パレスチナ地方では人が死ぬと、その日に葬式が行われていたそうです(例：使5章5-6、10節)。ユダヤ人は、死者の魂は、死後三日間は死体の周りをただよっているが、四日目には立ち去ってしまうと考えていました。ですから死後四日目頃から、死体の腐敗が目立つようになると、もはや死者のよみがえりはないと考えられていました。